アンチデスです

しゃヴぇ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
アンチデスです

【Ｎコード】
Ｎ８４０８Ｏ

【作者名】
しゃヴぇ

【あらすじ】
二人はどこか変で、おかしい。
けど、だからこそ私は愛おしく思う。
廃墟から始まる死なない二人の物語。二つの世界が繋がる物語。
これは、私の観察日記。

彼と彼女を見つけた日。　あるいは虹の橋から始まる物語。（前書き）

過去ネタを引っ張り出してみました。

誤字訂正しました

彼と彼女を見つけた日。　あるいは虹の橋から始まる物語。

ごめんなさい。関係ないですよね。貴方には。関係ない。そう。関係がない。

でもこれは誰かに話したい物語の一つ。私が見てきた世界の断片。とある町で起きた不思議な出来事。

これからお話しする物語の主人公は十七歳の女の子と男の子。

彼女たちを目撃したのは彼らと同じく十七歳の時のこと。

私は彼らに気づかれないようにそっと見守っていました。彼らの物語が終幕を迎えるまで。

緊張します。彼らの紡いだ物語を頭の中の記憶から文章という媒体に移すのが。

では、書き綴ります。彼らの物語を。

この物語に名をつけるとしたら…すなわち題名は「アンチデスです」です。

1七色橋を渡って彼女は来ました。

夜の廃墟。私はぼおっとしながら何かが始まるのを待っていました。

何故廃墟になんているのか？そんな野暮な質問はやめてください。

私は廃墟という空間に恋をしているのです。廃墟には何かが始まるような、そんな空気があるのです。

私は夜になるとこの町に一つしかない廃墟の建物に入ります。そこで何かが始まるのを待っているのです。

真っ暗な工場。がらんと広がる空間を窓の外から月明りが照らします。

背中がチリリとしました。これは始まるようです。異常発生。待ちに待った何かの始まりです。

七色の虹の橋を渡って彼女はやってきました。
廃墟の建物の中央にバチバチと放電しながら彼女はやってきました。
空間に穴が開き、そこから出てきたのでした。
髪の色はきれいな灰色。瞳も同じで灰色でした。その眼差しにどこか懐かしさを感じました。
彼女は外国人みたいに頭が小さく、私と違い、とてもスタイルがよいと思いました。
そして彼女の格好は上下ともタイトな黒い革の服装で私はかっこいいとも思いました。
ごにょごにょと、滑らかに紡がれる言葉は不思議な抑揚で、まるで歌のようでした。
彼女の状態から察するに違う世界から来たようです。何故そんなファンタジーな発想が出来るのかといいますと私はよく本を読んでいるからです。
特にＳＦとかです。あと剣と魔法の世界が舞台の小説とかです。
それに普通、人は深夜の廃墟に、放電しながら空間に穴を開けて七色の虹の橋を渡ってきません。だからです。
何かそこで納得してはいけない気もしますが、それより彼女のことです。
彼女はこの世界に来て誰かを探しているようです。
そこで破裂音。その音に意識を飛ばされそうになりました。何事でしょう？　私が音の出所を探すと……　ありました。
遠くに一人の男の子が、あれは？　うん。よく映画で見る……
ああそうです、銃です。初めて見ました。銃です。
彼は何を狙って撃ったのでしょう？
ふと先ほどの女性を見れば、あらまあ。倒れてます。どうして？
ああ、男の子に撃たれたんですね。おでこに穴があいていたのでわかりました。
これはこれは……　大変です。

「お前か……」
私に気づいたのかしら？　そう思ったのですが、倒れた女の子が立ち上がるのを見て、この子に言ったのだと考え直しました。
女の子はオデコの穴を指で押さえながら、男の子を睨みます。口から歌が紡がれます。
男の子は彼女の姿を見て呆れるようにため息。
「二度と来るなって言ったの覚えてる？　覚えてない？　というか言葉通じてる？」
この二人は顔見知りのようです。
女の子は無事でした。よかった。
ただ何か拳を硬く握り締めて、ステップを踏み始めました。彼女は歌います。低く響く冷たい音色。怒っているようです。
「お前メンドクサイよ」
発砲。パッと、一瞬廃墟に光が溢れます。
再び彼女は貫かれました。
だけど、立ち上がります。
彼女は短く息を吐き、走りました。
ただ彼は弾丸を放ちます。何度も世界は瞬き、彼女の姿がコマ撮り映像のように。
彼女は撃たれ、身体中に穴が開きます。絵の具をぶちまけたように赤が飛び散ります。
それでも彼女は走ります。彼に向かって。距離を詰めて。
もうすぐ彼に飛び掛るであろうところで、両手を回転させるように身体を捻り、バネが弾けるように跳躍。
空中でクルクルと、バレエのよう。足が伸ばされ、鈍器のように踵を彼のコメカミに。
これは凄いです。ああ良いものが見れました。表すならスイカがパーンって感じでしょうか？　スイカがパーン。
彼の頭部は消し飛びました。あーあー、この蹴りは、俗に言う消しゴムキックですね？

彼女はすぐさま彼から離れます。彼はまだ立っています。生きているのでしょうか？　頭と一緒に目も吹き飛んでるのにしっかり銃口は彼女に向けられてます。
発砲。三回。
予測したように彼女は踊るように避けました。本当に踊っているように見えます。
綺麗な、滑らかな動き。
彼に二度目の蹴り。上と下が離れてやっと彼は止まりました。止まった彼を見てトーン、トーンと彼女はその場で跳躍。ストンと止まり、そしてゆっくりと周囲を確認。
彼女が何かを見つけたようです。一点をただ睨んでいます。
私も見てみると、廃墟入り口には男の子が立っていました。頭も身体もちゃんとした状態で。
「満足か？」
彼女が再びステップを踏もうとすると、彼はそう言って何かを放り投げました。
彼女の足元にガサッと落ちたのは小さな紙袋。
彼女はそれが何なのかわからないといった様子で、不思議そうに眺めています。
あれは……　なんでしょう？
彼女は紙袋を手に取り、耳元で小さく振りました。カサカサと音が聞こえます。
「それが欲しかったんだろ？」
彼女は何か言葉を、初めて言葉を口にしました。
「だから何言ってるかわかんねぇって……」
彼女は何かを言っているのですが、私にもわかりませんでした。
彼は紙袋を開けるよう身振り手振りで彼女に伝えようとしています。でも彼女は眉間にシワを寄せるだけでした。
怪訝な顔つきで彼女は紙袋を何度も振ります。
ため息を吐く彼。

「それ食ったらさっさと帰れよ。俺はもう帰る」
じゃあなと言って彼は去りました。
残された彼女は紙袋と彼が去った先を交互に見て、また振りました。
窺うように周りを見て、彼女は紙袋を凝視。
もう一度周囲に誰もいないことを確認して、彼女はスンスンと匂いを嗅ぎました。
彼女は何か考えるように首を傾げます。
彼女は短く歌います。
首を傾げ、意を決したように、納得したように何度も頷きました。
駆け足で彼女は廃墟を出て行きました。
物語が始まりました。

2

彼らが去った後、廃墟に残された私はこれからどうしようか考え中。

二人を追って、彼らの物語を見るか？

それとも、今現れた黒い煙の人を見るか？

煙男はバラバラに散った男の子の体の前に立ち、ユラユラと目を凝らさなければ消えてしまいそうな身体を揺らしています。真っ赤な口内を大きく開いて笑っています。

私は誰にも気づかれるはずがないんだけどぁ。黒い煙は私を見ているような気がします。

うーん……

煙は放って置きましょう。今は二人を追うことにします。

私は立ち上がり、廃墟を出ます。振り返れば影はニタニタ笑っていました。

さてさて、二人はどこに行ったのでしょうか？

夜になっても空気が生暖かいです。早く秋こないかな？

外に出てみたのはよいものの、二人の足取りはわかりません。

とりあえず、この町にいることは確かでしょう。

でも、それが特定できない。困りました。

腕時計を見ればもうすぐ日付が変わる頃です。

あー、すぐに追えばよかったなぁと考えてもあとの祭りって奴です。

うーん……

こう、何か目印になるものを付ければ良かったのかも知れませんが……　あ、これもあとの祭りって奴ですね。あはは。

とりあえず探しましょう。考えてみれば女の子は普通お見かけし

ない格好をされてましたし、男の子は鉄砲を持っていたのですからきっと風の噂が教えてくれるでしょう。
さてさて……
風さん風さん偉大な風さん。私に教えて頂戴な。ちょっと風さん囁いて。私の鼓膜を激しく揺らして。
何か噂を聞いた？　風の噂を私に教えて下さいな。
よし。
これで来るはずです。耳をすませば……
「噂を聞きたいの？」
もう来たんですか。早いですね。さすがですね風さん。
私の耳元で風が囁きます。
「廃墟の二人のことだね？」
あの、私が入ってませんよ？
「あの二人は化物だよね。死なないんだもの。もしかしたらもう死んでるから死なないのかも」
風は平坦な声で笑っています。完全に私と別物扱いですか。そうですか。他に二人の噂はないんですか？
「あれはどこにいるんだろう？　ああ、二人は今あそこにいるんだ。へー」
何処にいるのか教えてくださいよぉ。怒っちゃいますよ？
「頂戴よ。噂を頂戴」
噂ですかぁ？　うーん……　そうですねぇ……　私の知ってる噂なんて大したこと無いですよー。
「頂戴」
えー。そんな声で脅しても駄目ですよー。風さんは私を直接食べれないでしょうに。あはは。
「知らないぞ知らないぞ。どうなっても知らないぞ」
えー。困りますー。じゃあ何が知りたいんですかぁ？
「怖い噂」
また怖い噂ですかぁ？　増やすんですか？

「増やす増やす」
最近見たそういう系は……　あ、じゃあ、煙男知ってます？
「知らない知らない」
黒いんですよ。そりゃ黒くてもうこれは大変黒かったです。全身黒いんですよ。
「それでそれで？」
黒いんですけど、その口だけは真っ赤なんですよぉ。
「それでそれで？」
はいおしまい。先に二人の噂頂戴。
「二人のあの後のこと。男の子が追ってきた女の子をバンバンってしたんだ。でね、二人は男の子の家に入った」
場所はどこぉ？
「続き頂戴」
ブルブルって震えてるんですよぉ。震えながらニタニタ笑うんですよぉ。二人の続き頂戴。
「家は大きいなぁ。すっごく大きい。屋敷かなぁ？　屋敷といえばあそこ出るんだよね」
何が出るんです？
ハッとした。風が笑ってる。
まずい。流されちゃったようです。ここら辺で終わらせないと……
風が頂戴頂戴と繰り返し始める。
最後ですよ。まず風にそのことを伝える。風は低くて重く響く声で頷く。
煙男は食べるんですよ。
「なにを」
わかるでしょうに。貴方も知ってるでしょうに。
「あれ……　かい？　あれを食べるのかい？　食べちゃうのかい？」
そうですよ。あれを食べちゃうんですよ。そりゃあ口が赤いんですからねぇ。ペチャペチャ食べるんですよ。啜るんですよ。
風はケタケタ笑い、増えた増えたと繰り返しながら去って行きま

した。
ああ増えちゃった。まあいいや。しーらんピ、しーらんピ。実体化しても私知らないって言い張るもぉん。
でも、屋敷ですか。ああ、困りました。
風さん見事にふって来ましたね。
大体噂って流した人が最初に体験するっていうお決まりがありますもんねぇ。
屋敷で煙男と遭遇間違いなしです。困ったものです。
と・り・あ・え・ず！
屋敷へゴウです。

屋敷の白田さん

3

はて？　屋敷と風の噂に教えてもらいましたが、どの屋敷でしょう？

この町には二つあったような、なかったような……。

とりあえず、ここからだと白田さんの屋敷が近いですね。

日の出は何時だっけかなぁ？　それまでに帰らないと。よし。急いで歩こう。時間はあまり無いもんね。

でも、本当につまらない町だこと。

なんにもなーい！　なんにもないもーん！　ツマラナーイ！

ああ、平坦な道を月明かりが照らしています。そこを下りながら私は沢山の人とすれ違います。知ってる顔ばかりでやはりツマラナイ。

その中のおばさんに「あら、ウスイちゃんこんばんは。今日も頑張るわねぇ」と声を掛けられて私は、頑張ってますよぉと返します。

みんな帰るんですか？　と訊けば、「そうよーかえるのよー」と口を押さえておほほ……　と笑うおばさん。

おばさんのこと、とっても大好きですよぉ。もうバラバラにしたくなるぐらい。と心の中で言っときます。

帰っていく人たちを見送って、私も再び歩きます。

日の出までに戻ってこれるかしら？　そんな事を考えながら十五分ほど歩いて白田さんの屋敷のある住宅地に到着。

クルクル回りながら住宅地を捜索開始！　あはは、コマですよー。近づくと危ないぜぇ！　パラリラパラリラー。とか叫びながら私は回ります。うん。独り言です。

目が回ってきたところで屋敷を発見しました。白田さんちです。白田さんの屋敷は随分とボロボロになってます。

さすが白田さん。ずっと誰からも奪われずに住み続けているので

すから、白田さんはとんでもない人なんでしょう。
白田さんとは関わらないほうがいいって先輩に教えてもらったけど、あの二人がどうなったのか知るためには入るしかありません。白田さんを怒らせないように二人を見つけないとねぇ。そういえば、二人は白田さんと会ったのかなぁ？　あ、ああ、マズイなぁ。早く見に行かないと。
私は屋敷の門扉を叩きます。何度も何度も叩きます。すると扉のあっち側からジャリ、ジャリ、ジャリと足音が聞こえてきました。足音は扉を挟んだ向こう側で止まりました。
「なぁーあーにー」白田さんの冷たくて平坦な声。
白田さん白田さん。変なの来ませんでした？
「変なの沢山来たわよぉー。黒い煙が沢山来たわー。とてもおいしかったわぁー」
煙男食べちゃったんですかぁ。そうですか。他には来ませんでした？
「バラバラにしても死なない子供が二人いるわよぉ？」
よかった。白田さん、その二人に会わせて貰えませんか？
「貴方もたべられたいのぉ？」
いえいえ滅相もございません。二人を確認したいだけなのです。その後は煮る焼くなりご自由にどうぞ。
うふふ。そう笑い声が聞こえたと同時に、ギギギッと軋みながら門が開かれました。短髪で死に装束姿の私の姉が立っていました。白田さんはどうやら食べられてしまったようです。姉が手招きしています。
「私にまた会いに来てくれてありがとうねぇ」
よく私ってわかったね。あれから何回か変わったと思うけど。
「だって私の可愛い妹なのですからねぇ」
白田さんが煙男食べてくれたの？　ああ、白田さんお姉ちゃんに食べられたのか。
「可愛い妹に手を出すものはお姉さんが食べてあげないとねぇ」

感謝感謝。
「白田さんってヨソヨソしい呼び方、そろそろやめてくれないかしら？」
白田さんは白田さんでしょう？　それより二人は？
「白田さんはやめてよぉ」
そう言って頬を膨らませる白田さん。
白田さんを食べたからお姉ちゃんは白田さんでしょ？　前の名前は元白田さんについてるんじゃない？
ションボリ俯いて、白田さんは黙り込む。
ああめんどくさいなぁ。白田さん美味しかった？
「全然。噂で聞くほどの奴とは思えなかったわぁ　つまらない奴だった」
ふーん。
二人は？
「居間で眠ってもらってますよぉ」
さすが一族内でそこそこ強いお姉さまです。二人を食べることはしなかったようです。二人を食べてたら大変だったでしょうに。だって私が怒っちゃうんだもの。

白田さんと私。（前書き）

ぶっ壊れました

白田さんと私。

4

「相も変わらず、虚ろなオメメだこと。おねぇちゃん悲しいわぁ」
お姉さまはそんな事を言って私を舐めるように見ます。
今なら貴方を食べられるかも。そう言ってお姉さまは笑いました。
何言ってるんでしょうねぇ？
ああ、放置放置。姉に巻き込まれないように回避しましょう。二人がいるという居間に向かいましょう。
門をくぐってジャリジャリと敷き詰められた白い石を踏み鳴らし、ああ、白田さんってどんな奴だっけなと思いました。姉に目をつけられたのだからそこそこ良い線行っていたのでしょう。
うーん。どうしてついてくるのかしらねぇ？　お姉さま、後ろにぴったりついて来て何のつもりです？
「ん、姉だからよぉ？」
うん。まあそうですけど。あ、あれですか？　食べようとしているって奴ですか？
私がそういうとお姉さまは「うふふ」と笑いました。
お姉ちゃん。私を食べるにはちょっと時期早々って奴ですよ？
貴方は自分の足でも齧ってなさい。暗い場所は私に味方しているのをお忘れですか？　ねえお姉さま？
「でもねぇ、美味しそうなんだものねぇ」
そうですか。うむむ。これは回避できないのかなぁ？
させないわよ。
後ろを歩いていたはずの姉が目の前に現れます。あー、メンドクサイなぁ。
「私を回避するの？　回避しちゃうの？　私から逃げだすことが出来るのかなぁ？」
首をゆっくりゆっくり傾けて姉は「うふふ」と笑いました。お姉

さまは私を巻き込もうとしているのね？　はいはい。ならば良いでしょう。巻き込まれましょう。
「準備できた？」
出来ましたよ。出来てました。だから私はここにいるのです。一回貴方を解体しましょう。
「解体できなければ？」
さあ？　その時考えましょう。
「ルールはいつも通りで」
はいはい。
ルールはいつも通り。壊したほうの勝ちですね？
さて解体を始めましょう。先攻はお姉さまからですよ。
姉の体ふわっと浮きます。口を開く。
「揺らぎですねぇ。ふらつく私の足元は、いつもいつも茨道」
暗い砂利道が姿を変え始めます。私は次の定義を待ちます。
「私は寂しいわ。赤い森の中で一人きり。沢山の赤。これは薔薇かしら？」
姉の手には一輪の薔薇が。
「あら？　空に月があるわ？　真っ赤な真っ赤な月が出てる」
姉は夜空を指します。見れば赤い月が出ています。これはなかなか大きな月です。
「歌声が聞こえてきた。何を歌っているのかしら？」
姉はララと平坦な声で呟きます。
「わかったわ。この歌はあの人の歌ね。ほうらやっぱりあの人だ」
定義終了。と言って姉は目を閉じた。
来るぞ。
そいつは歌を歌いながら現れる。
聞こえてきた。
耐えろ。
近づいてくる。

ｅｒａｓｅ.
強制終了……
起動します。

私は負けてはならない。
つまりは簡単に食われてしまった。
だけど、お姉ちゃん。
私は認めないよ？
「認めなさいよぉ」
認める？　何を？　理解できないわ？
「それが貴方の強さ？　弱さでは？」
消すよ？　私の中から消すよ？
「あら？　存在否定できるのかしら？　私の複製品に過ぎない貴方が？」
いつからお前はいたんだ？　いつから語っていた？　ねえ、いつからなの白田さん？
「ばれた？」
白田さん、この手はもう使えなくなったよ？　どうするの？　まだ姉を騙る？
姉の姿をしたお前は誰？　便宜上、貴方を白田さんと呼びましょう。だけど、白田を騙る貴方は誰？
「繋げちゃう？」
繋げる？　何をですかぁ？　ぶっ飛んでますねぇ？
私は訊いた。だけどすでに白田さんは消えていた。
白田さんは確かに私の姉でしょう。だけど、私と彼女は繋がっていないのです。別物。
語ることに関してはまだ私は彼女に敵いませんね。でも、ここは私の世界だ。よって彼女の介入は認めない。

ふぅ。切り替えましょう。
彼女の存在は全てを壊すようです。危うく……
やめましょう。彼女を語っても終わりません。
私は風に揺られてギシギシギシと鳴る扉を閉じます。そしてもう一度、今度は私の手で門を開く。
開けた先に見えるのは古ぼけた西洋風の屋敷で、石など敷き詰められてません。先ほどの光景は全て彼女の見せた世界なのだと結論付けましょう。
思い出しましょう。風の噂が言っていたのは二人が屋敷に……
まて、二人は男の子の家にいるのではなかったか？　ここは白田さんちだ。白田さんは私と同類だから……
つまりどういうことでしょう？　ここは白田さんちだから……
男の子は白田さんのお子さん？　いやいや、白田さんは私の姉のようなものですからもしそうなら知らないはずがないです。
これは……　ああ！
そうか！
ああ、やってしまいました。これは大変だ。ここに二人はいない。いるはずがない。
はぁ……
どこで思い違いをしたのでしょう？　私ってお馬鹿さんっ　テヘッ
白田さんちは男の子の家にいるはずがない。風の噂が「二人は男の子の家にいる」と言ったのですから。
よし。調子を取り戻しましょう。こういう時こそ風の噂に頼りたいのですが、このような蛇足に付き合うほど彼も暇ではないでしょう。
失った時間は戻らない。ならば私のすべきことは？
いいから探そう。まずここから移動して……
鍵は、何だ？
髪と瞳が灰色の女の子と鉄砲持った男の子。あとは死なないことかなぁ？

二人の名前はなんだ？
わからないことだらけです。
そういう時は荒業を使いましょう。私があの人の妹ならば出来るはずです。
俗世間でよく言うゼウスエクスマキナ……？　かなぁ？　困ったときはご都合主義モードで行きます。
二人のいる場所に私は立つ。
そう宣言すればよかったのですよ。そうです。そうなのです。
ほら、流れますよ？

現在朝の四時半。私はちょっと大きい脚立を肩にかけてふらふら漂うように町を歩いていました。
ああ、これ重いです。肩にぐいぐい食い込んで、痛いのなんのって……　そもそも脚立を使うこと自体恥ですが、仕方がありません。これがなければ私は男の子の家に忍び込めません。
日の出までに帰らないとまずいと言っておきながら、結局帰りませんでした。後で怒られそうです。誰に？　私のお父様とでも言っておきましょう。
さてさて。
まだ日本という世界は暗いです。新聞配達に勤しむ好青年を見つけました。頑張りますねぇ。
ああ、ボヤッとした顔で自転車を漕ぐ姿はなんと可愛らしいのでしょう。そんな彼にはプレゼントを差し上げましょう。いや、ただの実験です。私はまだ人に見つからないのかという……
ポケットの中のサイコロを一つ取り出して、投げつけます。彼の額に命中。驚いてそのままガシャンと転倒。新聞が散らばります。
彼は呻きながら立ち上がり、周りを見渡します。何が起きたのかわからない様子です。
くすくす。
青年の額にめり込んだサイコロの目は三でした。ふむ。青年よ三

が出たぞよ。よかったのう。
彼はよろよろと散らばった新聞をカゴに積んで、また自転車を漕ぎ始めました。彼はいつ死んだことに気がつくのかしらねぇ？　三分後かしら？　それとも三年？
この様子なら大丈夫。私の存在希薄という欠点がちゃんと働いているようです。
さて、男の子の家に着きました。高い塀で囲まれたこの家に入るためにはやっぱし門から入るのですが、門の前には二人の門番が立っています。
えっと……　確か二人の名前は……　そうだ。近藤さんと木村さんでした。
私は脚立を一度置いて、二人の門番、近藤さんと木村さんの前に立ちます。二人は私が見えてないようです。よしよし。
悪戯心で近藤さんのおしりをなでなでしてみようと思います。
私の気配がいかに希薄かどうかの再び実験です。近藤さんのおしりを、なでなで。
「…お、おい。木村。何俺のケツ撫でてんだよ」
「は？撫でるって…おいおい。俺が触るわけ無いだろホモじゃねーんだから」
くすくす。
近藤さんは当たり前のように言いました。当たり前です。撫でたのは私です。
やっぱり私の存在に気づいていません。安全なようです。
「っつ…おかしいな。今誰かが撫でたんだよ」
と、近藤さん。
「俺はやっていない。こうしてピーンッと立っていたじゃねえか」
と、木村さん。
「そ、そうだよな。気のせい。だよな…」
くすくす。お馬鹿さんですねぇ。
私は脚立を組み立てて塀に設置します。

上って塀の屋根から重い脚立を引き上げました。塀の内側に降ろします。

私は静かに静かに足を踏み外さないように降ります。

やった。侵入成功です。

潜入開始　と同時に捕獲された私（前書き）

ぶっ壊れから生まれる先。

潜入開始　と同時に捕獲された私

5

あれまあ……　これはこれは広いお庭をお持ちですね。噴水はありませんが池があります。そしてこれまたでかい屋敷がどーんと立っています。古きよき時代のお金持ちさんの家って感じです。まったく男の子のお父さんは何者でしょうねぇ？

さて、例の二人はどこにいるのかしら？　探しましょう。と思ったのですが灰色髪の女の子を見つけました。縁側に座りながら紙袋を耳元で振ってます。というかまだガサガサ振ってます。いい加減開ければよいのに。まさか開け方を知らない訳ではないでしょう。

艶がない灰色の髪がふわふわ揺れて、灰色の瞳は爛々と輝いてます。首を傾け眉間にシワを寄せながら紙袋を振る彼女はちょいと可愛らしい……　のかなぁ？　まあ私の主観では可愛らしいということで。

でもまあ、手足が細くて長くて羨ましいかぎりです。私もそうなりたいものです。

それに比べ、嘆かわしき我が肉体！！　この中肉中背の至ってノーマルな、平均的なこの身体。良いところが見つからない。悪いところも見つからないこの身体！！　有り得ないです。お父様とお母様を怨んどきましょう。爆発して死にますように……

怨むのは終わったので次です。紙袋を振る彼女は何者なのか？　それを考えましょう。

誰かを探しに来たと断定しているのですが、あくまで流れを先読みしただけなので正確にはわかりません。

銃弾を避けたことといい、当たっても死ななかったことといい、とりあえず化物です。可愛らしい化物です。

あ、今女の子と目が合った気がしました。もしかして気づいているのかもしれません。が、放置します。日本語しゃべれませんしね

ぇ……　バレっこないですよ。それに彼女がこっちに来たとしても捕まる気はありませんし認めません！　そう、今彼女が立ち上がり私を捕まえようとも認めなければ良いだけなのです。彼女が目の前に立ち、私をジッと見てようとも良いのです。認めなければ！　変なのがいるーと女の子に馬鹿にされて、それを聞いた男の子が出てきて来ようとも！

そう。

認めなければ良いのです。

ですが……

二人に見つかってしまった私はどうすればよいのでしょうかねぇ？

ああ、男の子は私の首根っこ掴んで離しません。引きづられ、屋敷内へと……

とまあ、あっけなく発見された私です。あはは。捕まっちゃったぁ。

さてさて、連れて行かれたのは何故か無駄に広い……　というより生活感のない部屋ですね。どうやら男の子の部屋ようです。そしてそして、これも何故かわかりませんが朝食を共にしているのです。はて？　私の欠点というか見つからないという特性はどうしたのでしょう？　何で何で？

まあ良いです。こうして目玉焼きとトーストが食べられれば……

ちょいまち。流されてしまったよ。ああ、やってしまいました。何でこうなったのか私は男の子に訊きました。すると変なものを見る目で「知らん」と返してきました。

「お前が何なのかわからんが、あれだろ？　化物って奴だろ？　いや、答えないでいい。正直知りたくない。ただ、こいつがなぁ……」

そう言って男の子は灰色髪の女の子を箸で指しました。お行儀悪い人だ。

「こいつも化物みたいな奴だろ？　で、お前も。そして俺も。化物三人で仲良くお食事するのも悪くないと……　いや、俺はそんなこと望んじゃいない。こいつがな……」

また女の子を箸で指します。女の子は箸で指されるたび、目をシバシバさせています。何ですかこの男の子は？　というかなんですかこの展開は？

「いやな、俺は嫌なんだよ正直。うん。正直嫌だよ。でもな、自分以外の奴はどうなのかってのが……　いや、俺はそんなこと思っちゃいない。こいつがな、うん。こいつはそう思ってるんだろうなぁって」

男の子が箸で女の子を指した瞬間、女の子は男の子を殴りました。男の子の粉砕された頭部は部屋に飛び散りました。頭を失った男の子は、やれやれ……　と両手をブラブラさせて倒れました。

そして部屋の扉を開けて男の子が「殴ること無いだろうが」と不満を漏らしつつ戻ってきました。戻ってきて男の子は自分の首なし遺体を足で部屋の隅に転がしていきました。気にしないんですか？

「いや、すぐ消えるから大丈夫だろ」

そう言って何事も無かったかのように真っ赤なケチャップが追加されたトーストを齧ります。いや、流石にそこまで平然とされても怖いです。

「そういや、お前廃墟にいただろ？」

え？　いきなりその話になるんですか？　はあ、いましたよ。

「最初はなんか変なのがいるって感じただけだったから無視してたけど、ここに来たってことはやっぱし化物だろう？　なんで来たん？　あれか？　復讐って奴か？」

いや、話が全く見えないんですけど。

「いや、俺はあれなんだよあれ。そうそう。えーと……　正義のヒーロー的な奴？　うん。正義のヒーローだよ。つまり化物をぶっ殺してこの町の平和を守る正義のヒーロー。だからとうとう悪の手先が来たのかと……　ね。で、こいつが変な奴がいるって言ったから気になってみてみたら、あれ？　廃墟に居た奴じゃんってことでこうなったのだ。うん」

一人納得して頷く男の子。女の子は朝食には手を出さず紙袋を振

っています。
そういえばすいません、お名前は……？
俺？　男の子はそう言って自分を指差しました。すこし焦っているようです。
「あー、俺は……　いや、俺は教えたくないんだよ。化物なんかに名乗る名はねぇ！　といいたいところだが……」
いや、そのフリはもういいです。教えてください。
「あ、ああ。尾崎語録。尾崎が苗字で語録が名前。親しい人からはゴローと呼ばれてます」
「親しい奴は少ないけどね」と男の子は、語録は付け加えました。
じゃあ語録君。こちらの見目麗しきお嬢さんは？
「しらね」
語録がそういったと同時に再び頭部が吹き飛びました。本日二度目ですか。
「アンチデス」
女の子が語録を殴った手で自分を指差しながらたどたどしく言いました。
「アンチデス、アンチデス！」
女の子の名はアンチデスですか……　あれ？　日本語覚えたんですか？
首を傾げるアンチデスさん。ありゃ、少ししか覚えてない様子ですね。
「お前はアン子でいいんだよ！　何度も殺しやがってこの野郎……」
扉が蹴り破って語録君は入ってきました。
「アン子ヤダ」
「はいはいアンチデスさんね。はいはいちゃんとそう呼ぶようにしますよ」
仲が良くていいですね。それより語録くんは何でアンチデスさんを家に招いたんですか？
「なんか懐かれたって奴だ。食い物に釣ったとも言えるが……　ま

あそんな感じだ」
それで、語録君は何で化物を倒しているんですか？
「趣味」
語録くんはそう言った後「へっ」と笑いました。

部屋の掃除と再び白田さん（前書き）

誤字脱字訂正

部屋の掃除と再び白田さん

6

怪物殺しを趣味と語る怪物少年、尾崎語録。そして、彼に怪物と称されるアンチデス。そして私。

三人が出会うとどうなるか？

これから何が起きるのか？

それはたぶん……　流れの確定。

終わりが確定されるのでしょうねぇ……

さて、そんな事を考えながら私は語録くんの部屋を掃除しています。掃除してくれないと殺しちゃうぞ的な……　うーん。脅迫によって掃除をさせられているのです。語録くんとアンチデスさんは出かけてしまいました。いやはや……　調子ぶっこきやがって……

あ、いやいや失礼。可憐な私のイメージが崩れ去ってしまいますね。

私は楽しく語らなければなりません。楽しくおかしく、元気に朗らかに。

それが私の存在理由。

でも、語り続ければ……

いずれそれは。終わりのときは来るでしょう。

だから楽しくおかしく語りましょう。この世界を楽しく楽しく……

私の力では崩壊を阻止することなんて無理でしょう。

はい。悲しい話になりますよ的な雰囲気が出されてます。でも私は認めませんよぉ。

というか、語録くんのでっどぼでぇーは煙のように消えるのに血は消えないんですかねぇ？　ぬれた雑巾で壁に付着した赤を取り除こうとさっきからゴシゴシと、こう必死にやっているわけですが……

いやぁ……　困りました。なかなか落ちません。ちょっと時間を置き過ぎたせいですね、きっと。

「無駄じゃない？」

いや、そうなんですけど殺されるのは困りますからねぇ。鉛弾でオデコに穴開けられて脳みそぐちゃぐちゃにされるのは困りますからねぇ。それと……

「ん？」

白田さん。不法侵入ですよ？　捕まりますよ？　というか……

唐突に現れないでくださいよ。貴方が来ると壊れるんですよ。

「なにがぁ？」

ああ、そんな目で見ないでくださいお姉さま。すいませんすいません。私は役立たずですはい。もうホントどうしようもないです。すいませんすいません……　ってこんだけ謝ってるんですから血走った目でニヤケるのやめてくださいって。

「呑み込まれるよ？」

わかってます。わかってますって。二人と一緒にいれば私も巻き込まれるのはわかってます。巻き込まれれば私も一緒に消えるのもわかってますって。

「何にもわかってない」

何がですか？　わかってますよ。呑み込まれれば私は二度と存在できなくなる。そうでしょう？　それがどうしたのです。お姉さまの言葉を遣わしてもらいますが、知らんですよ！

「なぁんにもわかっちゃいないよ。お前……」

そう言って姉さまは壁に残る赤いシミをなぞりました。

「お前は消したがり屋か？　これも一つの思い出だろうに。それとも……」

最初からお前は語る気がなかったのか？　認めないの一言でお前の消滅を回避できると思ったのか？　若干怒っているように見えるお姉さま。

「そうなったとしたら……　私はお前を認めない」

言い切りました。姉さま言い切っちゃった。

「お前は……　機械か？」

違います。私は人です。

「じゃあ、人の姿をした別のものかもしれないねぇ」
私は人です。そういい切ると、お姉さまは顔を歪ませてヒヒヒと笑いました。
「お前は私の妹。お前は私じゃない。なら……」
しょうがないのかな。急に真顔に戻ったお姉さまは呟きました。
「それも一つの道かもしれないなぁ」
そう言ってお姉さまは風景と混じるように溶けて消えました。赤いシミも消えていました。「これでいい？」と姉の声が遠くで聞こえた気がしました。

さよならを一回。そして次のさよならを。

7

掃除を終えて一休み。語録くんもアンチデスさんもまだ帰ってきてません。ああ、お腹がすいたなぁ……

日も出てしまい、私の特性も力を失っているでしょう。もし外に出歩こうものならきっと誰かに食べられてしまいます。

かと言って、このままここでダラダラするのも勿体無い。

どうしましょう。こうしましょう。

風さん風さん偉大な風さん。私に教えて頂戴な。ちょっと風さん囁いて。私の鼓膜を激しく揺らして。

何か噂を聞いた？　風の噂を私に教えて下さいな。

「はいはい。なんでしょうか？」

あら？　いつもと感じが違いますよ？　まあ風の噂ですから当然ですね。

風の噂さん、黒い煙男ってどうなった？　なんかあれの……　こう出て来ました！　っていう実感ないんですよねぇ……　って反応無しですか！　なんとか言ってくださいよぉ。

耳元でムニャムニャと溶けたアイスの様な声で風の噂は何か言っているのですが、サッパリ分かりません。

私はドロドロと紡がれていく言葉を解読しようと頑張ったのですが、サッパリ。唯一理解できた単語は「死ぬよ」だけでした。

はて？　死ぬよですか。誰が死ぬのでしょう？

最初に語録くんとアンチデスさんを思い浮かべましたが、あの二人は死にそうにありません。というか死なないでしょう。

では、他に誰がいるのかなぁ……　お姉さま？　お父様？　まさかまさかの私？

うーん……

誰が死ぬか分かりませんね。キャハ！　あ、新聞配達の青年かも。キャハキャハ。
はい。次に展開しましょう。
風の噂さん。結局煙男はどうなったのですか？　貴方質問に答えてないでしょうが。
そう言うと風の噂は頂戴頂戴とボソボソと繰り返し呟き始めました。うーん……　噂のネタがないから教えてあげられないなぁ……
うーん……
じゃあ、煙男の話を少し確定させましょうかね。
煙男は真っ黒で、モヤモヤとブルブルと煙のようでゼリーのよう。真っ赤な口の奥底に、真っ青な球体があって、それはきっと地球。
風の噂は私の鼓膜をゆっくりと響かせながら頷いています。
その地球にも私たちは住んでいて、その中の私や語録くんやアンチデスさんが煙男の心というか魂かな？　でもその中には煙男はいない。だってそこは一度目の世界なのだから。
「意味が分からないよ」
風の噂は薄っぺらい声色でそう言ったのですが、気にしません。私は噂を語り続けます。
この物語は完成される事なく消えた。それが一度目。
今終わりに向かって進むこの物語は二度目の世界。だからこそ煙男はいるのですよ。
風の噂さん。あなたは一度目の世界を覚えていますか？
「これは噂なの？　噂なの？　本当に……」
噂だよ。これは噂。紛れもなく嘘かもしれない噂だよ。
私は優しく丁寧に風の噂に言い聞かせました。すると風の噂は黙り込み、死んじゃうの？　と何度も私に質問してきました。
私は死ぬでしょう。多分貴方も死ぬでしょう。そう答えると、風の噂は唸るように嗚咽。
大丈夫大丈夫。貴方は別の物語にも出てますから。
「でも君がいない」と風の噂。

それでも大丈夫。信用ならないのなら高らかにこう宣言しましょう。

「私は死んでも大丈夫なのです」

だって、私も貴方と同じなのですからね。

さあ帰った帰った。二人が戻ってきますよ？　見つかったら大変です。貴方の姿はちょっと変わっていますから。

嫌だ嫌だと繰り返す風の噂に私は断固認めませんと言って帰らせます。

はあ。まったく。

私一人だけだと本当に静かだ。はぁ。

いけません。ため息を吐いてしまいました。でも吐いちゃう時もありますよね。

もう二度と会うことはないでしょう。認めたくなくても、決定していますから。

悲しいなんて認めません。だから私は笑います。

はい。次が展開されます。

風の噂を帰らせてから、再び私は退屈に襲われ、助けてーと叫びながら語録くんのベットの上で漫画を読んでいました。

そんな姿を帰ってきた語録くんに見つかり、危うく殺されかけましたがアンチデスさんの消しゴムキックというフォローで回避。事なきを得ました。

私は復活して戻ってきた語録くんに何をしていたのかと訊いたところ「怪物狩りだぜ！」とテンション高めの返答が帰ってきました。

詳しく訊くと、この町に潜んでいる怪物たちを無差別に殺しまわっているようです。この鬼畜生め！！　と私が罵ったところ、語録くんは「お褒めの言葉ありがとうございます」とケラケラ笑って答えました。

アンチデスさんはこの間も紙袋の音を聞くという一人遊びをしていました。

語録くんが落ち着きを取り戻し、テーブルの上に腰を掛けて私に

「なんかヤバイ奴知ってるか？」と訊いて来ました。
ヤバイ奴と称される方は何名か知っていましたが、大切な友人でもあったので黙っていようと考えたその時「隠し事はするな」と語録くんに睨まれました。
困りましたとアンチデスさんに助けを乞いましたが、一人遊び継続中で相手にもされず、ジッと獲物を品定めをする獣のような眼つきの語録くんに耐えかねた私は……
ヤバイ奴ですかぁ？　貴方の目の前にいるでしょうに。
そう彼に言ってしまいました。

終わる為に始まる崩壊

8

私の言葉を聞いた語録くんは気だるげに立ち上がり「それが本当なら精一杯楽しまないといけないね」と呟く。

一人遊びに夢中だったアンチデスさんも場の空気が変わった事で何事かと銃を手にした語録くんを見上げる。

私も立つ。語録くんは銃口を私に向けた。

「もう、始めるのかなぁ？」

私がそう口にしたと同時に語録くんは引き金を引いた。

続けざまに轟音、衝撃。

肩が打ち抜かれる。

「そんなんじゃ殺せないですよぉ？」

軽口たたいてますが、肩には煮える様な熱さと痛み。次に来るであろう衝撃を、恐れているのかガクガクと足が笑い出す。

「しっかりしっかり狙いを定めて。頑張らないと殺せないですよぉ？」

この口が勝手に言葉を紡ぐ。

引き金は再び引かれ、私は貫かれる。

痛み。この思考の糸を断ち切るには十分な痛み。

この痛みを語る事は難しいだろう。

語ろうとすれば、そう。

気がふれてしまうほどの痛み。思わず笑い出してしまうほどの痛み。ムズ痒くなるような痛み。全身が粟立つ痛み。

本当に死んでしまうのでは？　と疑いたくなるほど。そして疑うまでもない痛みの次に湧き上がる感情。

怒り、悲しみ、憎しみ。それと安らぎ。それらの感情が頭の中で飛び交い、衝突して燃え上がる別のイメージ。

それは。

「そろそろ……　そろそろ……　いいですかねぇ？」
壊したい。
穴ぼこだらけにされた私の身体。痛みなんかどうだっていい。この痛みだって愉快に語れる範囲だ。
それよりも。
それよりも、私は。
彼が私にやったように。
どうしても、彼がやるように誰かを壊してやりたい。
壊したい。
壊したい。
「私、貴方達のことが食べたくて仕方がなかったの」
私の身体が動き出す。
動かそうとする。否、勝手に動き出した。
「私」こと「臼井春香」は壊すことにした。

春香の耳にはあるメロディが流れていた。
歌っていたあの人は誰だったか。
思い出そうとしていたのだが、そこで春香は思考することを放棄した。

語録は春香を撃ち続けた。
赤い血と薄黄色の液体を潰れた片目から涙のように流し、撃ち抜かれ骨を砕かれた両手は力なくだらりと下げられている。
だけど、春香は倒れなかった。
時折歌を口ずさみ、ははは と笑い、「まだ？」と語録に催促する。
まだか？　まだなのか？　春香にそう言われるたび、語録は引き金を引く。

だけど、春香を殺せなかった。
こいつは死なないのではないか？　その考えを振り払う様に語録は銃弾を浴びせる。
「こりゃー変な世界だねぇ？　こんなに近いところにいるのに……」
殺せないのだもの。そう言って春香はガラスを引っ掻く様な音が混ざった声で笑う。
「殺せないの？」
笑う笑う笑う。殺せないの？　と春香は嘲笑。
「じゃあ貴方の番」
春香はボロ雑巾の様になった腕をゆっくり上げて、アンチデスを指差す。
アンチデスは目を丸々と開き、語録の後ろに隠れた。
ははは と笑う春香。逃げたのぉ？　隠れたのぉ？　と言って、さも愉快そうに笑い叫ぶ。
「私はいつでも貴方たちを食べられるの。いつでもよ？　私が奪いたいと思えば……」
このように。
春香が言い終えたと同時に語録は引き金を引いた。
しかし銃弾は放たれる事はなかった。語録は手に持つ銃に目をやるが、異常はない。それよりも語録の目に付いたのは変色した自らの手だった。
語録の銃を握る手が滑るように、まるで腐っていたかのようにもげた。語録は反射的にもげた手首を押さえたのだが、血は全くでなかった。
「いつでも、いつでもいつでも貴方たちを食べられる。でもね……」
その姿を見ながら春香はそっと二人に言い聞かせるように、優しく静かに語る。
「その前にもっと壊してよぉ」
春香は叫ぶ。もっと壊してくれないと美味しく食べられないと春香は叫ぶ。

この部屋には収まりきらない程、響く叫び。
笑って叫び終えた春香はつまらなそうにため息。残った片目を薄く閉じる。
「場所を変えましょうか」
その言葉を春香は口にして、くるりと回転。
一回転した春香の身体から傷はなかった。血と体液で汚れた学生服も元に戻っていた。
後ろに腕を組んで朗らかに微笑む春香。先ほどの彼女とは別人と思えるほど可憐に、嘘みたいに元気な笑顔。
場所はどこがいいかなぁ、と口元に指をあてて考え込むように視線を上へ。
お、そうだ！　と手を叩いて何か納得したように一人頷く。
「あの廃墟にしましょう！」
語録とアンチデスが出会った場所。春香が二人を見つけた場所。
そこが終着点だと彼女は言って二人の横を通り部屋を出て行った。

アンチデスと白田　語録と白井（前書き）

誤字脱字訂正……

9

春香が去った後に部屋に残されたのは得体の知れない気持ち悪さだった。

恐ろしげな風貌をしている訳でもなし。圧迫感を感じる訳でもなし。春香が残していったこのぼやけた感覚を語録はどうにか捉えようとしたのだが、浮かんだのは「底なし」という言葉だけ。

全てを当たり前の事の様に反応、対処して飲み込んでいく春香という女。あいつは限界まで振り切れていない。底なしだ。そう語録は思った。

「アン子、あれはなんだ？」

語録はアンチデスの第六感を頼って尋ねたが、少しの間を置いて「わからない」と返された。次に「見えなかった」と。

何が出てくるかわからない。深く暗い井戸を覗いた感覚だとアンチデスは呟く。

あの化物の事は何もわからない。

正体不明の化物。そう称する事しか出来ないほど、二人は春香の事を知らな過ぎた。

このまま……

アンチデスが口を開いた。

「このまま彼女を追えば、何か……」

アンチデスの口調は人が変わったかの様に冷たい。その冷たさは語録に「死」を連想させた。

この馬鹿には何が見えているのか？　と語録は次の言葉を待ったが、そのままアンチデスは黙っている。

あの化物は廃墟で俺たちを待っているだろう。そして俺たちは死ぬ。語録は珍しく悲観的な言葉を口にした。

その言葉を聞いてアンチデスは「大丈夫だよ」と笑う。

「語録は死なない」
俺は死なないのか？　そう語録が訊くとアンチデスは「死なない」と言い切る。
ふと語録はアン子と呼んでいる女のことが気になった。そういえばこいつは何でまたこの世界に来たのかと。
「アン子、お前なんでここにいるんだ？」
アンチデスは答えなかった。

二人は夜を駆ける。彼女の待つ廃墟へ。
網目のように入り組んだ住宅街を抜けて、月明かりだけが照らす道を駆ける。
包み込むような暗闇の中、語録は隣に並んで走るアンチデスを見て「俺たちはいつもこんな感じだったのかな」と思った。
あの時もこんな夜を駆け回っていた。
「お前はなんでここにいるんだ？」
語録は肩で息を吐きながら再びアンチデスに尋ねる。
「俺たちはお前を化物にした奴を倒した。そいつを倒したからお前は元の世界に帰った。それで終わったはずだ。なのに何でまた来たんだ？」
アンチデスを化物にした怪物。俺たちは倒したはずだ。だけどこいつはここにいる。
「答えろよ」そう語録が言い放って、少し間を置き「先に行くね」とアンチデス。
アンチデスは語録を置いて、目の前に広がる闇の中へ吸い込まれるように消えていった。
俺はいつも置いていかれるな。そう自嘲気味に語録は呟いた。

アンチデスはそいつの視線に気づいていた。
ドロドロとした唾液のような、纏わりつく糸の様な視線に。
その時、語録は何か言っていたのだがそいつの気配を探っていたアンチデスの耳には届いていなかった。
「先へ行くね」
語録を守る為にもアンチデスはそいつを叩くことにした。
そして……
そいつを見つけた。
白い装束を身に纏ったそいつは、赤く濁った両目を大きく開いてユラユラと身体を揺らす。
「こんばんはぁ」
女は待ちくたびれたとでも言わんばかりに身体をゆっくり捻る。女は自身の調子を確認するように、さらに身体を捻らす。アンチデスの耳に骨の砕ける音が聞こえてくる。
アンチデスは「春香」から感じた違和感と同じものを感じた。全身がざわつく。アンチデスの第六感が囁く。「こいつは春香と同類だ」と。
女の口から途切れ途切れに紡がれる言葉は「あの子」やら「消す」やら「壊す」やら、アンチデスには理解できなかった。
理解できないのが理解できた。それだけで十分とアンチデスは拳を強く握り締める。
女が笑う。アンチデスの心を見透かすように。
アンチデスは相手を潰す事だけに集中し、跳躍した。

語録は廃墟に辿りついた。

がらんと広がる空間に立ち、アンチデスを探すが見つからなかった。
「いらっしゃいませぇ～」
不意に投げかけられた言葉の出所を探ると春香はすぐ横に座っていた。
「アンチデスさんは？」
小首をかしげ、立ち上がって春香は語録に尋ねた。
声を無視してジッと春香を睨む語録。
返答しない語録に対し、何が面白かったのかケラケラ笑い出す春香。「無視するな～」という平坦な声が廃墟内に響き渡る。
春香は両手を振りながら後退。クルリと回ってスカートを摘まんでポーズ。
「語録くんの適正距離ですよぉ」
語録は銃を構える。狙う先は女の額。
女は笑う。語録の考えを嘲笑するように。
語録は相手を貫く事だけに集中し、引き金を引いた。

流れる。

１０

突風。疾風。或いは音そのもの。アンチデスが纏うは音の塊。重く響く、轟音、轟音。
音は女を飲み込む。ただ一撃殴れば終わる。だが、アンチデスは未だ女を砕けずにいた。
女は液体のように身体をくねらせ一撃目を避けた。次を放てど女は影のようにアンチデスの後ろに回る。
一撃必殺の「速度」とそれを支える死なない身体。アンチデスが持つ最大の武器。
死ななければ負ける事はない。圧倒的な速さで相手を潰せば残るのは「勝った」という結果だけ。
当たらなければ？　次を。
次も駄目だったら？　さらにその次を。
アンチデスはそうやって勝ち続けた。死ななければ負けない。負けなければ勝てる。
今はまだ倒せてない。このまま続ければいずれ倒せる。
アンチデスの持つ「勝利の方程式」は単純明快だった。それ故にもう勝敗はついていたのかも知れない。
「私たちには沢山の名がある」女が笑う。
女は後ろから、アンチデスの耳元で、そっと囁く。「貴方が見ているものはなに？」と。「貴方の相手は誰？」と。
「勝つとか負けるとか……　私は」
どうでもいいのよ。甘く艶かしい声がアンチデスの鼓膜を震わす。
「貴方の考える勝利の方程式。とても好きよ？」
でもねぇ……

アンチデスはただ虚空に拳を振るう。
「それで私の遊び相手が務まると思っているのなら、ちょっと……」
心外だわぁ……
そう言って女がアンチデスの首筋を舐める。それに気づきながらも女が残した残像を殴る事しかできなかった。それをやめてしまったら勝つ事は絶対にできないから。
「貴方には取っておきの設定をプレゼントしてあげるわ」
アンチデスは語録を守る為に必死に「勝利」を掴み取ろうとしていた。

放たれた弾丸は春香の額に溶けるようにその身を埋める。皮膚を貫き、骨を砕き、温かな脳の中で鉛でできた小さな体躯を震わせ、やがて収まるべき場所を見つけて止まった。
これで終わるわけがない。額に開いた穴から中身をこぼさない様に身体を大きく仰け反らせる春香。その姿を見て、語録の手はフラフラと振れ、照準が定まらなくなった。
語録は息を短く吐き、一旦全身の力を抜く。
俺は緊張しているのだろう。唐突に「何か」を起こされたとき、対処できるかと。
俺は興奮しているのだろう。倒せるわけない相手を倒せるかもしれないと感じて。
根拠はないが。語録は手に持つ銃の重みを確かめ、引き金に指をかける。
天を仰いだまま、春香は指を一本立て、軽く、叩くように左胸を指した。「次はここを」と。

語録は指示に従ってその的に狙いを定める。
これで奴が死ぬとは思えない。春香にとってこれはただのお遊びに過ぎないだろう。
語録は馬鹿馬鹿しいと心の中で呟く。
受ける痛みを笑って楽しむ春香。それと、足先からじわじわと上ってくる恐れや畏怖といった感覚に喜びを隠せない自分。
本当に馬鹿馬鹿しい。語録は引き金を引いた。
吸い込まれるように弾丸は左胸を貫く。
春香は貫かれた事を確かめる様に胸に手を当てる。胸から脳へと伝達されている痛みを「最高」と言って身体を震わせた。
春香は次の「的」を指した。次は下腹部だった。
これ以外に出来る事がない。語録は再び引き金を引いた。
指が「もう一回」と急かすように腹部を指し続ける。語録はそれに従うしかなかった。

春香は次へ次へと「的」を指示し、その注文を語録は丁寧に片付けていく。
春香は自身に加えられていく痛みを感じ、ははは と笑い、満足したのか身体を持ち上げる様に起こし、語録を見つめた。
その顔は恍惚としていて、薄く開かれた唇から甘ったるい吐息が零れている。
春香は受けた感覚を確かめるように服越しに銃創に触れ、指を中へと滑らせる。
掻きまわし終え、満足げに笑い小首を傾げて春香は微笑む。春香の瞳はらんらんと輝き「もう一度」と訴えていた。嘆息を漏らし語録は銃を捨てる。
「あれれ？　捨てちゃうんですか？　あ～あ、唯一の攻撃手段を捨てちゃったぁ……」
次はどうするのぉ？　という質問に語録は「どうせお前は殺せない」と返す。

「私を殺す。確かに無理かもねぇ。殺されるなんて私は認めませんもの」
でもね。
「覚悟はしてますよ？　死ぬ覚悟って奴をね」
春香は微笑む。そしてクルリと一回転。受けた傷を消してお行儀良くポーズ。
死ぬって奴をそう簡単に覚悟されても、こっちが馬鹿馬鹿しくなるだけだ。語録は死にそうにない春香のむちゃくちゃな力に呆れた。
「俺はどうやればお前を倒せる？」
語録は春香に訊いてみた。
「倒す相手ではないのですよぉ」
と春香は答え、手を頭の横でクルクルと回し、私は倒す相手ではない。と今度は冷たく静かに口にした。
じゃあ誰を倒せばいいんだよ？　そう語録は思った。こいつを倒してはいけないのなら、誰を倒せばいいのだ。目の前の化物を殺さずに何を殺せと？
「この世界は何度目かなぁ……？」
春香の口から不可解な言葉が紡がれる。語録は何故か「黙れ」と声を荒げたが、逆に「黙って」と春香に制された。
語録が言葉を詰まると同時に滑らかに春香は語り出した。
「良くお聞きなさい語録くん。この世界を二度目と称するのはおかしな事です。そりゃそうですよ。世界に一度目も二度目もないんだからね。でも、語録くんは覚えているでしょうに。アンチデスさんを化物にした怪物を倒した日のことを」
語録は思い出そうとして、ふと春香の言葉の中に違和感を感じた。
何故？　何故、春香がその事を知っているのだ？　語録の疑問を察したのか、春香は「ずっと見ていましたから」とそっけなく答えて話を続ける。
「あの日、語録くんとアンチデスさんは目的を達成して元の世界に帰った。貴方も非日常から日常へと帰った。つまり物語を終えた訳

です。じゃあこの世界はなんだろう？　終わった物語の先にあるこの世界はなんだ？　と……」
そこで私の出した結論は二度目の世界。と得意げに春香は言った。
「二度目の世界に敵はもういません。すでに倒してしまったのですからねぇ。でも語録くんは「怪物狩り」をしていた日々を忘れられなかった」
だからこうして再び語られたです。そう言って春香は目を伏せる。
「貴方がこんなことを始めなければ……」
語録は春香の言わんとする事がわからなかった。
「貴方が「怪物狩り」を続けていたからアンチデスさんは再びこの世界に来る事となった。彼女は貴方を守らなくてはならないから。それが貴方が知りたかったアンチデスさんがこの世界にいる理由」
それ故に、私たちの死は確定されました。貴方がやめないから。
「意味がわからない」
貴方が倒すのは私ではない。
「黙れ」
倒すのは。
貴方の隣にいつもいたあの子。
アンチデスです。

流れる。（後書き）

次の話で終わらせます。

終わり。（前書き）

誤字脱字訂正。改行ミス修正。12／5

終わり。

１０

「ふざけるな」
語録がどなり、廃墟に響く。
ばかげた事を言うな俺は認めないと語録は春香の言葉を拒絶する。
語録の表情はみるみるうちに怒りに歪んでいく。
「アン子がこの世界に来たのは俺が怪物狩りを止めなかったから？
それがどう転んでアン子を倒すってなるんだ？　関係ない。まったく関係がない」
俺はお前を倒すんだよ。俺の存在理由は化物をぶっ殺す事なんだよ。
「そう」
春香の表情が消える。作者に逆らうのなら対処するしかない。鈴の音の様な澄んだ声で春香は答えた。
「私だって姉に負けるわけにはいかないのよ。勝つ為には貴方が必要だったけれど……」
しょうがない事ね。
春香は両腕を下から上へとゆっくりと上げる。肩より少し上で腕は止められる。手のひらは下を向いてそこから黒い煙があがる。
「貴方にとっておきのプレゼントをあげるねぇ……」
語録は身構えるがその時すでに春香の両手が語録の掴んでいた。
春香の両手から立ち上っていた黒い煙はさらに勢いを増して大きく広がっていく。
「貴方が死なないのは生きてないからだよぉ？　だからねぇ」
これでもかっていう位の生きるって奴をあげるよぉ。
「濃厚な生をプレゼント・フォウ・ユウ！！」
その瞬間、黒い煙はまるで生き物のように語録の目や鼻、口の中

に入っていく。語録は喉の奥へと次々に侵入してくる異物によって呼吸もままならずもがく。
「もうお前は絶対に死ねないよぉ。本当に死んじゃうからねぇ！！」
春香は語録の頭から両手を離し、大きく高く笑う。そして足元咳き込んでいる語録を見下ろし蹴り飛ばす。
「私はもう知らない。本当にもうしぃーらなぁい。貴方はこれからずっと死ぬことに怯えながら生きればいいわぁ！！　あはは。そろそろ来るでしょうねぇ？　あの子が来るでしょうねぇ？　おねぇさまは私を助ける為にあの子を改竄しただろうしねぇ？」
春香は「あはは」と平坦に笑い、もう一度今度は叫ぶように笑った。
「語録くん。貴方は見ているだけしか出来ないの。貴方を殺しに来るアンチデスを私が壊すのをね」
壊れていると思うのは今更な話だが、改めて春香が壊れている事を語録は再認識した。なんでアンチデスが俺を殺しに来るんだと。
「私は絶対に認めない！」
再び春香はそう言って語録を蹴り上げる。鈍い痛みが腹部で暴れだし語録の思考は中断された。
「私が姉さまに劣るなんて！」
春香は何度も語録を蹴り上げた。蹴られるたびに語録の口からうめき声が漏れ、唾液と赤黒い血が吐き出される。
「私の消滅を助けるだって？　ふざけるな。この世界は私の為だけにあって、私の望みをかなえる為だけに存在を許された世界よ？　その世界で死ぬことを認めないだって？　あのポンコツは何を仰っているのかしらねぇ！　ああ、お父様に深く愛されてさぞ幸せでしょうねぇ！」
私だって愛されたいのよ！
そう春香は叫んで気が済んだのか足元の語録にニッコリと微笑む。
私が語り始めなければ、こんな事にはならなかった。と春香は呟きながら足をまげて語録の頬に手をあてる。

「ごめんなさいね」
語録の頬を流れるように自然な動きで撫でる。語録は振り払おうとしたのだが、感じた事のない痛みというものに捕らわれ動けなかった。語録が意識できたのは頬を撫でた彼女の手の冷たさと細かく震えていたことだけだった。
「ここは私の終着点。だから後は貴方が語って……」
ごめんなさい。

俺の身体は全く動かなかった。
今まで感じた事のない痛みと倦怠感。どろりとした感覚に耐えられそうにない。俺ははやく次の身体に移りたいと必死に願ったのだが、未だ乗り換える事が出来ずにいた。
俺はすぐそばに立っている春香を見た。春香の顔からは感情を読み取る事はできなかった。春香は倒れている俺の右手側にある廃墟入り口をジッと見つめている。
喉の奥から込み上げてくる吐き気に耐え切れず俺は吐く。吐き出して息を整えて楽になって冷静に吐き出したそれを見るとびっくりするくらい真っ赤だった。血ってこんなに赤かったか？　と俺は思ったが、今更そんな事はどうでもいい。それよりも春香から「何か」されたせいで次の身体に移れないことが重要だ。
次に移れなければ俺は何処に行けばいいのだろうか？　このままこの身体に残るしかないのか？　この身体はもう先は長くない。さっさと移動したいものだが……
もう一度春香を見る。

俺は元に戻してくれと春香に言いたくなった。だが良く考えて「かっこ悪い」からやめた。なんで化物なんかに懇願しなければならないのだ。

もういい。次の身体の事は諦めよう。

ははは、このままだと死にそうだ。

ああ、寒い。寒い寒い。

あー、辛い。

やはり、頼んでみるか？

俺は春香に声をかけようとするが、ちょうど良くアンチデスが来た様で頼まずに済んだ。春香は俺を跨いで入り口の方へと歩き始めた。

こんな状態でもスカートの内を確認してしまうものだな。はは……

ちなみに水色と白のボーダーだ。

俺は首をゆっくりと回し、視界の中に春香とアンチデスを収める。その時アンチデスの後ろにもう一人いることに気づいた。その顔は驚くほど春香に似ていた。さっき春香が言っていたお姉さまって奴はあいつの事だな。

春香が立ち止まり、そこから十歩ほど先にアンチデスと春香姉が立っている。よし、その間合いならアンチデスは確実に春香を

ぶん殴れる。効くかどうかわからんが、絶対に当てられる距離だ。

「おねぇさま。いい加減諦めてくれませんか？」

「あなたこそ認めなさいよ。その子を使って死ぬ気だったんでしょうけど……　あれ？　倒れてんじゃん」

白装束の女は「あれぇ？」と間抜けな声を上げて首を傾げた。

「おねぇさまの考えている事はよ～くわかりますよぉ？　ここに語録くんだけしか来なかった時からわかっていましたよぉ？」

それを聞いて白装束の女は「失敗したかぁ」と笑った。この姉妹の掛け合いはなんというか……　奇妙の極みというか……　ホントぶっ殺したくなるほどイカれてるな。

「お前はその小僧によって殺されてハッピーエンドを目指そうとしたのだろう。あはは。私はこいつら両方死なせてお前を救うトゥルーエンドを目指したのだが……　本当に大失敗だな」
あー、アン子早く春香をぶっ倒せよ……　いつまでそんな人形みたいにぼぅっとしているんだ？
ああ！　早くしろって！
「あなた……　なんかいつにも増して目が虚ろだけど……　まあいいわ。出番よアンチデウス」
アンチデウスと呼ばれアン子の瞳に光が宿る。ってか一体どうしたんだ？　まさかあの白女に操られているとか？
「アンチデウス。良い名でしょう？　この物語にはぴったりな役名よねぇ？」
始めろ。
白装束女が静かに言い放つとアンチデスはその場でトーントーンと飛び跳ね、拳を強く握り締め構える。春香も迎え撃つ為に片手から黒い煙を漂わせる。
「さよなら姉さん」
「アンチデウス！　そこの男を砕け！」
アン子の姿は一瞬で消える。次の瞬間には俺の目の前にある天井に張りついていた。
と、ちょっと待て。マジでアン子は俺を殺す気なのか？　アン子そのまま天井を蹴り俺へと――
「させないよ」
春香の腕が風を切り裂くように振るわれる。黒い煙が俺の目の前でグルグルと渦巻き、アン子が轟音立てて拳を振るう。黒い煙はアン子の拳を包み込むように受け止め、次に来る衝撃から俺を守った。
マジでアン子は操られているのか？　じゃあこのなかに俺の助けてくれる奴はいないじゃん。
マジでありえねぇ。どんな状態だよ。アン子は白装束女に操られていて、春香は俺を守りながらアンチデスと白装束を倒そうとして

いる。白装束女はアンチデスを助けるとか言っていて……
ああ！　わけわからん！
春香はアン子を殺そうとするだろう。なんか知らんが俺を守っているってことは殺すに違いない。春香は化物だ。
だが……　春香に言わなくては……
俺は腹に力を込めて声を出す。が、口から出るのは零れるように血だけ。
くそ！
アン子は全身に音を纏い、春香の黒い煙を掻き消し、姿を消した。天井にはいつの間にか穴が開いている。
その穴から月の光を浴びたアン子が見えた。
ヤバイ。あれが来る。しかもあんな高いところから……
地面がガタガタと揺れ始め、俺の回りにあった小さなコンクリ片が飛び跳ね始めた。建物全体が振動する。
馬鹿かアイツは！　全部ぶっ壊すつもりか！
この場の異常に気づいたのか春香はすぐさま俺に覆いかぶさり黒い煙を展開させる。
「馬鹿やろう……　お前……」
血を溢しながらも俺は声を出す事に成功した。
「語録はとりあえず私が守る」
とりあえずだよね。だけど……
「死ぬぞ……」
「死んでもかまわない。だけど……」
あなたは死なせない。
ガタガタと建物は更に悲鳴を上げる。どんどん揺れは増して行き、遠くで爆発するような音が。
お前が俺をボコボコにしたくせに何があなたは死なせないだ！
そう罵倒しようとした瞬間に衝撃が来た。
耳の奥がアン子が纏う爆音で痛くて痛くてしょうがない。鼓膜が破れなかったのは春香のお陰か？

廃墟は砕かれ、大小様々な瓦礫と化し吹き飛ぶ。そしてアン子はすでに春香の黒い煙を突き抜けようとしていた。突き抜けられないように春香は更に黒煙を全身から放つ。目と鼻の先でアン子がいる。無表情で俺たちを包む黒煙を殴り続けている。

アン子は止まる事はない。駄目だ。絶対貫かれる。ってか春香まで死ぬ気か？　こいつは最初から死ぬ気だったのだろうな。じゃなきゃこんなことする意味がない。

「包め」

春香の口元が丁度俺の耳近くにあったからその小さな命令が聞こえた。

黒い煙はゆっくりとアン子を包む。

「アンチデス初期化」

その言葉を春香が口にするとアン子を包み込んでいた黒煙は濃度を増して小さく圧縮されていった。

アン子の身体を包み込む黒煙は更に圧縮され濃度を増しアン子の身体の自由を奪っていく。

「殺さないでくれ」

俺はアン子がまだ殴ろうとしている姿を見て春香に懇願した。

「イレイス」

黒煙は一気に膨張してそのまま風船のように弾けた。包まれていたアン子の意識は切れているようでふわっとゆっくり舞い上がって糸を切ったようにそのまま落下してコンクリートに叩きつけられた。

春香はアンチデスを殺してしまった。春香は俺に乗っかるようにして覆いかぶさっているままで動かない。

「おい……」

春香を退かそうとしたのだが、俺にはその力も残されていなかった。

次にアン子に目をやる。アン子は眠るように瞳を閉じられ、唇は軽く開かれている。

「畜生……が」

その声に答える様に春香はボソボソと言葉を紡ぐ。
「大丈夫。これで全部終わった……」
春香に目をやるとアン子と同じく人形のようになっていた。

廃墟が崩壊した。天井も壁も最初からなかったと言われれば信じてしまうほどサッパリと跡形もなく消えた。
春香は死んだ。死んだ春香はとても静かで、安らかに眠っている様な表情をジッと見て、実は春香はビックリするほど綺麗な顔立ちをしていることを知った。ニヤついた顔かぶっ飛んでる顔しか見た事がなかったから心底驚いた。
その春香が何をもって死んだのかそれはわからなかったのだが、多分あの黒い煙と関係があるのだろう。
白い女は、春香の姉らしき者はいつの間にか姿を消していた。結局、春香と白い女の化物姉妹の正体は不明。訳わからん化物の類だと片付けるしかない。
俺はアン子の元まで行こうと思い、だけど立ち上がることは出来ず、鉛のように重くなった腕を動かして少しずつだが距離を埋めていく。
やっとのことで倒れているアン子の隣まで来て、そこで身体を捻って俺は仰向けに寝転がる。
俺ももうすぐ死にそうだ。死ぬのならやっぱりアン子の隣で死にたい。馬鹿馬鹿しいがそれが本音だ。
「なあアン子、月が出てるぞ」
空にはとても大きな月が浮かんでいる。本当に大きな月だ。こっ

ちに落ちてきている様な大きさ。赤みを帯びたまんまるの月だった。
「落ちてきそうな月だなぁ……」
当たり前だがアン子は答えない。それでも俺は続ける。
「この前渡したあれ、食べたのかぁ？」
食べたのかどうかわからなかった。アン子はずっと封を開けずに振って遊んでいただけだったし……
「あれはちょうど今見てる月みたいな形でな、サクッとした食感の……　俗にいう……　クッキーって奴だよ」
アン子だってクッキーぐらい食べた事ある。そんなのはわかってる。
「まあ……　あれだ。語録特製の……　手作りクッキーな訳で……いや、お前の為に作ったんじゃないぞ？」
はぁ……　月が霞んで見えてきた。もう駄目か。
「また会った時も……」
俺はもう一度、目に焼き付ける為にアン子を見る。
「よろしくな」
俺はゆっくりを目を閉じて、また再びアン子と巡り合えるよう願った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8408o/

アンチデスです

2010年12月5日23時25分発行